

2021年度 慶應義塾大学 法学部 論述力

【解答例1】

著者は、文学と政治との対立の底に個人と社会との対立を見出す。両者をつなぐ鍵になる言葉が「一匹」だ。「悪しき政治」は「失せたる一匹」を無視し、「善き政治」はその救いを文学に期待する。「悪しき政治」は自身が負うべき負荷を文学に負わせていたと著者は指摘する。こうした認識を踏まえて、著者は個人と社会との関係に緊張と対立を見出す。緊張とは社会が「一匹」たる個人を「抹殺」したり、個人が「扼殺」される危険を感じる状況をいう。また、対立とは社会が個人を「矛盾対立」するものとして拒否することである。しかし、ここで強調される「社会正義」にはエゴイズムが忍び込み、その現実には「醜悪な自我の赤裸々な闘争の場」だと著者はいう。そして、社会を「私心も野望もなき個人」の集合と考えるのは、「空想的観念的なユートピア」だと指摘する。

以上にまとめた著者の議論を読みながら、私はコロナ禍における日常に思いをめぐらせた。著者がいうように「その一匹がどこにもある」ように思えたからだ。

たとえば、マスクをめぐる個人と社会の対立である。私がこの論文を書いている試験会場では、受験生も監督官も全員がマスクをつけている。それは、感染防止という社会正義からみれば当然のことである。しかし、ここにも「一匹」がいるかもしれない。心身の事情から、マスクに息苦しさや苦痛を感じている人である。試験会場から外に出ても、マスク着用をめぐる社会が個人に緊張を与えたり、対立をもたらす場面がある。マスクに限らず、感染防止という目的の「正しさ」は、こうした緊張と対立を不可視化する。そして多くの人たちの自覚がないまま、「一匹」の権利や自由を奪っている。

政治は、個人と社会の緊張と対立を無視したり、これを解決する負荷を文学に負わせるべきではない。著者がいう「在りかた」を見直さなければならぬ。それは九十九匹ではなく、「一匹」に寄り添い、その事情や思いをよく聴く姿勢と態勢を持つことだ。ただ、これは議会という政治チャンネルだけでは実現が難しい。議会の意思決定は九十九匹という多数派に委ねられるからだ。「一匹」を救うため私が期待するのは、もう一つのチャンネル・裁判だ。議論を通じて社会的な意思決定をする点で裁判も政治である。これによって「一匹」の権利を守りつつ、「社会と個人との融合」をめざすことも理想としたい。

(999字)

【解答例2】

政治は正しき九十九匹のためにあり、文学は失せたる一匹のためにある。すぐれた精神は自分自身のうちにその一匹の所在を感じているが故にこれを見失うことがない。ぼくたちが五流の文学しか持ちえなかったのは、悪しき政治がそれ自身の負うべき負荷を文学に負わせたことで、失せたる一匹をぎりぎりのところで見ていなかったためである。このような文学と政治の対立の底には、個人と社会との対立がひそんでいる。社会は残余を持つはずのないものと規定され、個人はそれ自身の価値と世界を持つことを許されない。だが私心も野望もない個人の集合を前提にする政治意識や社会意識は観念的なユートピアだ。社会と個人の融合という理想を実現するには、両者の截然たる区別がなければならぬ。ぼくたちは見失われたる一匹をたずね歩くべきだ。そしてみずからその一匹であり、みずからのうちにその一匹を所有するもののみが、文学者の名に値する。

筆者のこの文章が書かれた当時、個人と社会との緊張と対立は現在とは異なり社会の圧倒的な優位によって展開していた。国家の生存権を主張して日本を破滅的な敗戦に導いた右派も、労働者階級の解放による恒久平和を主張し多くの支持を得ていた左派も、いずれも個人を超えた大きな物語の担い手だった。そこで問われていたのは体制の選択であり、その前に個人の小宇宙は窒息させられていたと言える。

だが現代における両者の緊張と対立は、当時とまったく異なる様相にある。個人に緊張を強い対立を仕掛けるのは社会ではなく、身近な他人だと考えられているからだ。呪いの言葉をかける毒親、地位を嵩に理不尽を押し付ける上司、粗暴で自分勝手な犯罪者、そして規範を共有しないとみなされる異文化の住人。これらが一匹の羊としてではなく「鬼」として扱われ、個人を脅かしていると考えられているのである。

このように社会が人々の意識の外に追いやられたことが現状の危機だ。重要なのはいかなる社会を共有するかが、人々の主要な関心は個人に対する共感や反感なのだ。そのため政府が展開する政策の妥当性を論じても、「がんばっているんだから批判するな」という一言で無効化されてしまう。これでは公的な利益に関する議論は不可能だ。どうすれば政治意識と社会意識を復権できるか、直面する重大な課題として考えるべきであろう。

(1000字)

2021年度 慶應義塾大学 法学部 論述力

【解答例3】

イエスは百匹の羊のうち群れからはぐれた一匹を探す羊飼いの比喻を用い、一度も罪を犯したことの無い者よりも罪を犯して神のもとにもどってきた者により大きな愛情を抱くキリスト者の態度を説いた。筆者はその言葉に政治と文学の差異を見出す。政治は九十九匹は救えても、迷える一匹には無力である。文学は「ひとりの罪人」を通して全ての人間を見つめ、その救いに全てをかける。こうした文学と政治の対立の底にひそむのは、個人と社会の対立である。現代の風潮は社会の名において個人を抹殺しようともくろんでいる。失せたる一匹が無視されるのは現代に限ったことではないが、今日のように社会正義という名分でその抹殺を正当化した時代は他になかった。しかし自我というものは抑圧しても消滅しきれぬものであり、あらゆる社会正義の裏口からエゴイズムがそつとしのびこんでいる。社会意識によって個人を完全に包摂するというのは観念的ユートピアである。

フランスのスカーフ問題を例にあげたい。フランスではイスラム教徒の女性が公共の場でスカーフやヴェールを身に着けることに対する規制がある。その根拠として挙げられるのがライシテ（政教分離）の原則だ。政教分離の原則は、本来国家の個人の信仰に対する干渉を控え、多様な価値観をもった人々の共存を可能にするものはずである。しかしフランスでは、かつて王権と結びつき強い権力をもっていたカトリック教会の影響力を政治や教育の場から排除し、共和制を確立するために政教分離が推し進められたという歴史があり、多数派はその歴史に誇りをもっている。政教分離が個人を野蛮な宗教から解放するための闘争として理解されている側面があるのだ。寛容で自由な社会をつくるための普遍的な原則が、フランス人のナショナリズムや、スカーフはイスラム教の女性抑圧の象徴という偏見と結びつき、個人の信仰に対する干渉を引き起こすというねじれが生じている。

迷える一匹を救いいうるという傲慢に陥った政治の目には、スカーフを着けた女性は宗教に洗脳され男性への隷従を受け入れている愚かで哀れな存在なのだろう。しかしフレンチムスリムの中にはアイデンティティの葛藤に苦しみつつ、西洋のリベリズムとイスラム教の価値を自分の中で統合しようと模索する人も少なくない。政治の役割は、誰もが自分の中の迷える一匹と向き合って生き方を模索することのできる寛容な社会を作ることだ。

(1000字)